

日本の百年／3

果てしなき戦線

1937 — 45

著者 山本 実  
第二 山本 実  
三文 山本 実  
一冊 山本 実  
合本 山本 実  
第一 山本 実  
一冊 山本 実  
第二 山本 実  
第一 山本 実  
第三 山本 実  
第四 山本 実  
第五 山本 実  
第六 山本 実  
第七 山本 実  
第八 山本 実  
第九 山本 実  
第十 山本 実

筑摩書房刊



1942年・東京日劇前

1961年・日劇ウエスタン・カーニバル



日本の百年

果てしなく

1971年

編集・執筆 鶴見 俊輔  
神島 二郎  
橋川 文三  
今井 清一  
松本三之介

資料顧問 井上 清  
大宅 壮一  
楫西 光速  
木村 毅  
菅井 準一  
隅谷三喜男  
瀬沼 茂樹  
西田 長寿  
林 茂  
宮尾しげを

目次

序章 十二月八日の記録……………一

1 太陽に祈る……………三

2 ある朝、目がさめると……………八

3 昨日は遠い昔……………二

4 孤独な人びと……………六

[カコミ]

9 大東亜戦争命名由来……………四

10 その日の帝都……………四

11 財界人は気が重かった……………六

第一部 大陸戦線の内と外……………三

第一章 宿命の日中戦争……………三

15 もうひとつのブローグ……………三

16 幻影の勝利……………三

17 惨たる入城式……………三

18 残虐と感傷と……………三

5 台所からみた開戦……………三

6 明治人の心……………三

7 ワシントン——その日……………三

8 敗戦の予言……………七

12 米英ってなんだい……………三

13 その日の文学者たち……………三

14 開戦の詔書……………六

19 リアリズムと錯覚……………三

20 戦う兵隊……………三

21 毛沢東の予言……………三

22	魅いられた人びと ——汪兆銘の悲劇	卷	23	軍曹と参謀と	卷
----	----------------------	---	----	--------	---

第二章 皇軍の肖像……………

24	村の召集令	壹	26	びんたの話	七
25	出動まで	壹	27	神様の兵器と兵器の神様	ハ

第三章 神話に生きる人びと……………

28	千人針	金	33	ゾルゲの生き方	一〇三
29	事変下のヒーロー	六	34	鈎十字と日の丸	一〇九
30	木綿の別れ	六	35	民族の祭典	一一三
31	天子様にささげる	論	36	国民はこう思う ——一九四〇年十二月	一六
32	日本のナチス帝国	先			

第四章 日本ゆきづまる……………

37	日米交渉	二九	40	三つの選択	一三七
38	一九四一年夏	三	41	「聖断」前後	一四一
39	近衛の挫折	二四			
〔カコミ〕					
42	中国要図	壹	45	疲れた兵隊	一五〇
43	東洋平和のためならば……	天	46	漢口作戦要図	一五三
44	いきびだ	壹	47	中国兵士の肖像	一五五

第二部 太平洋上の賭け……………

第一章 真珠湾からガ島まで……………

48	失われた地平線	五	54	最後のステップ	一〇〇
49	麦と兵隊	六	55	ひとはいつでもあぶない	一〇四
50	軍隊内務令・綱領(抄)	三	56	ナチスびいき	一一〇
51	不良学生狩り	六	57	街の新体制論議	一一二
52	戦う広告	六	58	開戦当時の指導者たち	一二六
53	ヒジョウジ	六	59	暗号電話の話	一二四

第二章 アジアの「国生み」……………

60	真珠湾攻撃	一元	64	蘭印攻略戦	一三
61	不沈戦艦の撃沈	一四	65	転機を予告するもの	一六
62	マレー快進撃のかけに	一五	66	ミッドウエーの敗因	一六
63	フィリッピン戦の誤算	一五	67	ガ島と餓兵	一三
68	「国生み」の神話	一六	73	ジャワの「国生み」	一四
69	満州国の天照大神	一六	74	ビルマ独立軍の運命	一七
70	日人と満人	一八	75	カチン国の憲法	二〇
71	対華工作者の疑惑	一八	76	「独立運動ハ過早ニ誘発 セシムルコトヲ避ク」	二〇
72	鹿地亘と今村均	一八			

77 シンガポールの悪夢 三〇

78 大東亜共栄圏と民族運動 三二

第三章 欲しがりません勝つまでは……………三七

83 君がため春の野にいで 若菜つむ 三六

79 隣組の効用 三七

84 転業と徴用 三三

80 「顧みはせし」の精神 三三

85 女性徴用の是非 三三

81 切符に泣く 三三

86 藤原銀次郎のみた軍需工業 三七

82 なんでも行列 三三

〔カ〕

87 一九四一年十二月八日 午前の日本軍の姿勢 二三

94 世界の最優秀民族 一〇

88 いまの若い者はなどと 申すまじ 二四

95 日本語教育と インドネシア語 二四

89 敵の敬すべきを知れ 二四

96 東条首相とラウレル大統領 二四

90 悲劇の將軍 二四

97 大東亜会議の二重性 二三

91 戦友別盃の歌 二五

98 大東亜文学者会議 二五

92 開戦一年の戦果図 二五

99 主婦を守れ 二六

93 東京空襲機の写真 二六

100 衣料切符の点数 二六

101 戦時下国民生活年誌 二七

102 「八紘」の死 二九

104 ありあまって困るもの 三三

103 一九四一年一月から四二年 六月までの転業状況 三三

105 華族とダイヤモンド 三六

第三部 敗北への道……………三九

第一章 玉砕あいつぐ……………四二

106 山本五十六の死 二四

110 レイテ突入ならず 三九

107 アッツ島玉砕す 二四

111 生きて還らず 三九

108 サイパン最後の日 二四

112 沖繩島の悲劇 三九

109 くびぎられた三人の師団長 二五

第二章 腐敗と崩潰……………四六

113 翼賛選挙の話 二五

117 東条暗殺計画 二六

114 首相と巡査 二五

118 憲兵から見た吉田茂 二九

115 マルクスはロシア人 二五

119 三木清の場合 三〇

116 中野正剛の場合 二五

第三章 死の壁に面して……………四七

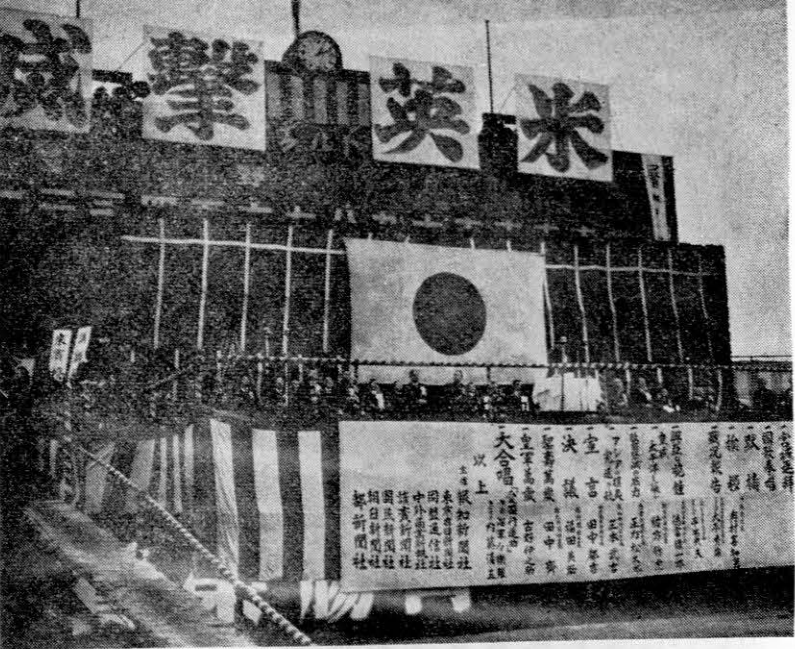
120 空襲下の日々 二七

122 タコツボと肉弾 三六

121 しらみ日記を書く 二七

123 ヒロシマ・ナガサキ 三三

こどもたち 三三



## 序章 十二月八日の記録

一九四一年一月二一日  
 連合艦隊に作戦部隊の出動が命令された。

一月 一日  
 御前会議で対米・英・蘭戦争の聖断が下った。

二月 八日  
 午前一時三〇分、日本陸軍がマレー上陸に成功した。午前三時二〇分、日本海軍航空隊が真珠湾を攻撃した。午前一時四〇分、宣戦の詔書が出された。

索引	年表	解説	自殺スタイルの変遷(百年の軌跡しらべ3)	124	「日本は負けていない」	125	八月十五日	126	死者の声
				127	「玉碎的美談」出するなかれ	128	太平洋の防波堤たらん	129	おい食われるなヨ
				130	ビルマ戦線要図	131	捷一号作戦・日本艦隊の陣容	132	捷一号作戦・各部隊航行図
				133	零戦のアブストラクト	134	「人生二十五年」論争	135	闇と顔
				136	大雪報でお叱り	137	一枚の旅行写真から	138	風船爆弾
				139	爆弾除けにらつきよう	140	都道府県別被害状況	141	疎開児童の献立表
				142	イーザリーへの手紙	143	焼く書類と残す書類	144	終戦の詔勅

こども —— 「大東亜戦争」って、なに？

わたし —— 日本がアメリカ、イギリスをはじめ、ほとんど世界中の国を相手にやった戦争のことだよ。インドにまで攻めこもうとしたんだ。

こども —— アメリカを取ろうと思ったの？

わたし —— ワシントン占領できるとは思わなかった。だけど、日本が負けるとも思わなかったな。

こども —— どうしても戦争しなけりゃいけなかったの？

わたし —— 戦争しなければ、日本は百年前に逆もどりして、いっさいやりなおしをしなければならなかったんだ。それがいやだったんだ。

こども —— 戦争しなかったら、昔に逆もどりするって、どうして？

## 1 太陽に祈る

一九四一年（昭和十六年）十二月八日未明——

東京はまだおだやかに眠っていた。冬空にはいちめん星がかがやき、とぎすました鎌のような三日月が浮いていた。

前日の日曜日にひきつづいて、その日もまた晴天にめぐまれそうにみえた。しかし、寒さはきびしく、早朝の空気の中には、刺すような霜の気配が感じられた。

まだ夜も深い午前二時半ごろ、一台の自動車が二重橋前の広場をよこぎり、坂下門にむかって走りすぎるのが見えた。車内にはひとりの人影が認められた。車のライトが坂下門の門扉を闇の中に浮かびあがらせると、皇宮警手の白い手袋の手があがるのが見え、門が左右に開かれた。車は玉砂利を噛むタイヤのひびきをのこして、大内山の奥深くにすべりこんでいった。

「外務大臣二時四十分参内——」

警手の電話報告の声がしんとした闇の中にきこえた。

（まだ太平洋にはなにことも起こってはいなかった。まだ

それまでには四十五分の間があった。）

「畏くもこの日午前二時すぎ御起床遊ばされた陛下には、海軍式御軍装を召されて、表御座所に出御、申すも畏れ多いことであるが、御机の前に御起立遊ばされる御凛々しき御尊姿には、御決然たる聖断のほども拝察されて、ただ神しききわみにあらせられたともれうけたまわる。かくてしんしんとして敵冬の冷氣しみわたる表御座所において、外相は四十分にあたり委曲奏上、種々御下問に奉答し、畏き聖旨を拝して、恐懼御前を退出したのであった。

皇国の隆替をこの一戦に賭けて断固米英撃滅の火ぶたが切られた日、陛下の御聖断は仰ぐも畏ききわみであるが、外相は、早晩にもかかわらせられず、御政務に御精勵あらせられる御尊姿を目のあたりに拝し、畏き聖慮にただ感泣しつつ宮中を退出、官邸に帰還したのであった。（朝日新聞一九四二年十二月八日）

一年後のおなじ日、新聞はその夜のもようをはじめてこゝろ伝えた。しかし、その時、外務大臣東郷茂徳（一八八二—一九五〇）が参内したのは、あらためて天皇の「聖断」を仰ぐなんらかの必要があったからではなかった。彼はただ、その日午前零時十五分、米国外使グルーから手渡され